

南島研究回想

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-04-11 キーワード (Ja): キーワード (En): Ethnology Folklore Kunio Yanagita Japanese and Ryukyuan Culture ethnic identity 作成者: 伊藤, 幹治 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003837

|||||
資 料
|||||

南島研究回想

伊 藤 幹 治*

Memoir of Field Work in the Southwestern Islands, Japan

Mikiharu Itoh

本稿は、1957年から1972年にかけて、南西諸島でおこなったフィールド・ワークの回想記である。その当時の日本における民俗学と民族学の関係、日本本土と沖縄の比較研究の視点と方法、宗教と社会の構造的関連、エスニック・アイデンティティについて述べる。

This paper is a memoir of field work undertaken in the Southwestern Islands, Japan from 1957 to 1972. The author discusses the interrelation of Folklore and Ethnology in Japan, the viewpoints and methods of comparative studies of Japan proper and Ryukyu, the structural relationships of folk religion and folk society, and ethnic identity in modern times.

*国立民族学博物館名誉教授

Key Words : Ethnology, Folklore, Kunio Yanagita, Japanese and Ryukyuan Culture, ethnic identity

キーワード : 民族学, 民俗学, 柳田国男, 日琉文化, エスニック・アイデンティティ

1 はじめに	5.1 日本社会構造論の波動
2 戦後の南島研究	5.2 宝島の宗教と社会
2.1 対峙する民族学と民俗学	6 日琉文化の比較
2.2 南島研究の再出発	6.1 沖縄調査の転機
3 日琉同祖論の展開と脱構築	6.2 日琉文化の再検討——稲作儀礼をめぐって
3.1 日琉同祖論の展開	6.3 兄弟に対する姉妹の霊的優越
3.2 日琉同祖論の脱構築	7 沖縄の宗教と社会
4 旅と調査のあいだ	7.1 「稲の産屋」と西表島祖納再訪
4.1 「根の国の話」の口述記録	7.2 民俗社会にひそむ論理——沖縄本島とその離島
4.2 旅の意味	7.3 宗教と社会の構造的連関の課題
4.3 旅もどきのフィールド・ワーク——奄美の島々	8 おわりに——揺らぐアイデンティティ
5 宗教と社会の構造的連関	

1 はじめに

南島とは、鹿児島県のトカラ、奄美の島々から沖縄県の八重山の島々に連なる南西諸島のことである。奄美群島の加計呂麻島と徳之島を訪れたのは1957年、トカラ列島最南端の宝島、沖縄本島とその離島を訪れたのは2年後の1959年、八重山諸島の石垣島、小浜島、鳩間島、西表島を訪れたのは翌1960年のことである。その後も1963年から64年にかけて、八重山諸島の西表島西海岸の祖納を再訪するほか、1965年にトカラ列島の中之島を訪れた。そして、1970年から72年にかけて、沖縄本島とその離島や八重山諸島の石垣島を訪れた。こうして、10年近いあいだ断続的に南西諸島の島々を訪れたことになる。

この回想記は、2009年4月18日に法政大学のヨーゼフ・クライナー特任教授（ドイツ・ボン大学名誉教授）が主宰する国際日本学研究所の研究会、「昭和30年代の南西諸島の民族学的研究と日本文化論」で報告した「南西諸島調査のころを回想する」を改題して、大幅に加筆訂正したものである。

わたしが南島の社会と文化に興味をもったのは、いまから半世紀以上も前の学生のことである。当時、柳田国男の小正月論、折口信夫のまれびと論、岡正雄の異人論な

どに触発されて、日本のナマハゲ、カセドリ、カユツリ、トロヘイなどとよばれる「小正月の訪問者」と、沖縄・八重山のニールピトゥ、赤マタ黒マタやメラネシア・ポリネシアのタマテ、ドゥクドゥク、アレオイなどとよばれる、祭祀的秘密結社に出現する「仮面＝仮装の来訪者」を比較した論文を執筆し、いつの日か南の島々を訪れたいという希望をふくらませていた。夢のまた夢を見ていたのである。

そこで、國學院大學大学院で柳田国男の女婿の宗教民俗学者、堀一郎教授のもとで南島の農耕儀礼の文献研究をはじめたが、その後南島への夢が徐々に現実味を帯びることになった。國學院大學に新設された日本文化研究所の研究員に採用され、南島研究と取り組む機会が近づいてきたからである。当時、研究員は任期が2年に限定され、業績審査によって任期延長が可能になるという不安定な状況におかれていたが、都立高校の専任教師を辞めて研究員に転じたのは、南の島々を訪れたいという願望が強かったからである。

わたしの南島研究はそれほど長期にわたるものではない。1957年から72年にかけての、たかだか10年足らずの短い年月に過ぎない。ここでは、当時の民族学（文化人類学・社会人類学）と民俗学の動向や、日本民族学会（旧・日本民族学協会、現・日本文化人類学会）の機関誌『民族学研究』が1950年以降、3回にわたって企画した「沖縄特集」を手がかりにして、エピソードを織りまぜながらささやかな南島研究を回顧することにしたい。

2 戦後の南島研究

2.1 対峙する民族学と民俗学

この国にはふたつの「ミンゾク」学がある。ひとつは、文化人類学とも社会人類学ともよばれる「民族学」である。もうひとつは、一国民俗学ともよばれる「民俗学」である。ふたつの「ミンゾク」学の境界領域で仕事をつづけてから50余年の歳月が流れている。

民族学は世界の諸民族の社会と文化を研究する学問といわれるが、2004年4月に日本民族学会が日本文化人類学会に改称され、機関誌『民族学研究』が『文化人類学』に改められた。このことは日本民族学が、国民国家を創出する基礎としての「エトノスとしての民族」の社会と文化の研究から、「アントロポスとしての人類」の社会と文化の研究に大きく舵を切ったことを意味する。日本民族学は、アントロポスと



南島略図 (□内は調査した島々を示す)

しての人類の社会と文化を研究する学問として再出発したとみてよからう。

他方の民俗学は、近代化や西洋化の過程で切り捨てられたこの国の民俗社会とその文化を手がかりにして、国民国家によって創出された「ネーションとしての自民族」(日本人)の社会や文化を総体として研究する学問といわれている。1980年代以降、民俗学にも柳田国男が構築した一国民俗学を脱構築して、民俗学の再構築を意図した動きがみられるようになった。現在、この国の社会がかかえている諸問題と積極的に取り組もうとする「現代民俗学」などは、そのひとつであろう。

こうした民族学と民俗学は、もともとひとつの根から生まれた学問であった。ふたつの学問が袂を分かつようになったのは、1934年から35年にかけてのころである。

柳田国男は1925年にヨーロッパ民族学に関心を寄せていた岡正雄、岡の友人の農村社会学の有賀喜左衛門、東洋史学の石田幹之助などの、わかい世代の研究者の協力を得て雑誌『民族』を創刊した。『民族』は民族学や民俗学のほかに、宗教学、考古学、言語学などの隣接諸科学の諸問題を取りあげた人類諸科学の雑誌であった。柳田は一国民俗学の方法論的基礎をかためるために『民族』の刊行にふみきったのであるが、この雑誌は1929年4月に4巻3号をもって廃刊となった。

『民族』が廃刊になると、柳田と民俗学の両翼を担っていた折口信夫を中心に、秋葉隆、有賀喜左衛門、宇野円空、金田一京助、小山栄三、松村武雄、松本信広などによって民俗学会が組織され、1929年7月に機関誌『民俗学』が創刊されることになった。この『民俗学』もまた、『民族』と同じようにふたつの「ミンゾク」学をつつみ込んだ雑誌であったが、1933年8月に5巻12号をもって廃刊となった。ちなみに、柳田は民俗学会の設立に参加しなかったばかりか、『民俗学』にも寄稿しようとしなかった。一国民俗学の確立を急務と考えたからであろうか。

1934年になると、ふたつの「ミンゾク」学の分離がいよいよ決定的なものになった。34年1月、柳田は前年の9月から自宅の書斎でひらいていた民間伝承の会を発展させて木曜会を組織した。そして、4月には郷土生活研究所を設立して、木曜会同人の協力を得て学術振興会の助成金を受け、3カ年計画の総合調査「日本僻陬諸村に於ける郷党生活の資料蒐集調査」を実施した。

こうして、柳田は8月には一国民俗学の理論的枠組みとそれに対するパラダイムをかためた『民間伝承論』を世に問うた。そして、翌35年9月柳田の還暦を祝賀してひらかれた日本民俗学講習会が実施され、それを機に民間伝承の会が結成され、機関誌『民間伝承』が発刊された。民間伝承の会は1949年に日本民俗学会に改称され、機関誌『民間伝承』は『日本民俗学』に改められて現在に至っている。

このような民俗学の動きに呼応するかのように、民俗学会を拠点とした人たちは、同じ1934年に石田幹之助、宇野円空、小山栄三を実行委員に選び、民俗学会を発展的に解消して日本民族学会を創設した。そして、11月に発起人会がひらかれ、初代理事長に白鳥庫吉、理事に渋谷敬三、新村出などが選出され、翌35年1月に機関誌『民族学研究』が創刊されることになった（伊藤1975: 36-37; 2006: 39-65）。

民族学と民俗学は、こうした経緯を経て訣別することになった。それから80年近い歳月が流れている。その間、ふたつの学問はつかず離れずの関係をたもってはきたが、両者のあいだに生じた亀裂は徐々に深まり、現在、相互交流がすっかり途絶えている。

人生の峠を越えたいま、戦後再出発した民族学と民俗学の南島研究の回顧を意図したのはほかでもない。いつの日かふたつの「ミンゾク」が、以前のように日本研究を介して親しい関係に再帰することが望ましいと考えたからである。また、グローバル化時代を迎えた今日、「他者としての異文化」を介して自己を知ることと、「自己としての自文化」を介して他者を知ることが、わたしたちにますます強く求められると考えたからでもある（伊藤 2011b: 193）。

2.2 南島研究の再出発

近年、わかい世代の文化人類学者のあいだに、文化人類学は「他者としての異文化」を研究する学問という認識がひろく受け入れられている。海外調査が以前よりも容易におこなわれるようになってきたからであろう。このことは、高度成長期以降の文化人類学者による海外調査の急速な進展と決して無縁ではあるまい。

戦後、異文化研究を目的とした海外調査が軌道に乗るようになったのは、1950年代後半のころからである。日本民族学会（現・日本文化人類学会）は、創立20周年にあたる1954年、記念事業として東南アジア稲作民族文化総合調査を企画し、1957年から63年にかけて東南アジアの大陸部と島嶼部、南アジアのインド、ネパールの調査が実施された。また1958年ごろから、京都大学のアフリカ調査、東京大学の南米調査がおこなわれた。こうした一連のプロジェクトに参加できたのは、ごくわずかな研究者にかぎられていたのは言うまでもない。

そして、1960年代になると、高度成長にともなって海外調査が活発におこなわれるようになった。1963年以降、文部省（現・文部科学省）の海外学術調査に対する科学研究費補助金の助成が漸増したからである。また、1968年になると文部省のアジア派遣留学制度が実施され、わかい世代の研究者に海外調査の門戸が徐々にひらかれるようになったからでもある（中根 1984: 43-44）。

民族学者による南島調査も、こうして飛躍的に発展を遂げた海外調査の動きと無縁ではなかった。南島のなかでも、当時アメリカの統治下にあった沖縄の島々は、海外調査の機会に恵まれなかったわかい世代の民族学（文化人類学・社会人類学）を志すものにとって、魅力的なフィールドであったからである。

戦後、ふたつの「ミンゾク」学のなかで、柳田国男が書斎を開放して設立した財団法人民俗学研究所では、1953年に南島調査を企画・実施していたが、他方の民族学で本格的な南島調査が実施されたのは、それからかなり遅れた1962年になってからである。東京都立大学（現・首都大学東京）の社会人類学教室が科学研究費補助金を

受けて南西諸島調査委員会が組織され、1962年から翌63年にかけて沖縄本島、宮古、八重山の島々の実地調査が本格的におこなわれることになった。

3 日琉同祖論の展開と脱構築

3.1 日琉同祖論の展開

柳田国男が日琉同祖論に関心を寄せたのは意外に古い。柳田が「島の三大旅行家」のひとりとよんだ笹森儀助が、沖縄本島、宮古、八重山の島々を踏査した『南島探験』（笹森 1894）読了後、数年経った1912年に発表した「塚と森の話（五）」のころにまでさかのぼる。そのなかで柳田は、琉球諸島のオガン（御願）と日本の塚や森とを比較し、日本と琉球が「先祖を共同にして居る従兄弟」であると述べている（柳田 1999: 122）。その後柳田は、1918年に「神道私見（完結）」を発表し、そのなかでも神が降臨する霊山のタケや神をまつる場所のヲガンを日本の山宮と里宮と対比し、ある時代の日本の宗教が琉球に存続していると推論している（柳田 2000: 265）。

こうして、柳田が日琉同祖論と本格的に取り組むようになったのは、1921年1月から2月にかけて奄美と沖縄の島々を訪れた翌年、南島談話会を設立したころである。柳田は1924年9月の啓明会主催の講演会で「南島研究の現状」と題した講演をおこない、そのなかで首里の王朝が全島にわたって信仰の統一を計画したずっと以前から、南北の遠く隔てた島々のあいだに驚くべき信仰の一致があった、しかもその一致は、ヤマト（日本）のわれわれとのあいだにも何人にも気のつくほど顕著なものがあつたと力説している（柳田 1998a: 88-89）。

その後も柳田は日琉同祖論に関心をもちつづけ、1934年に世に問うた『民間伝承論』のなかで「内地では極めて古いものが琉球では眼前に現存して居る」と述べている（柳田 1998b: 74）。また、翌35年に上梓した『郷土生活の研究法』に収録された「新たな国学」でも、琉球を「日本の古い分家」とみなし、日本文化と琉球文化の親近性が、言語や信仰ばかりでなく、家族組織、土地制度、芸能流伝の様式などの広範囲にわたると述べている（柳田 1998c: 251-252）。柳田が琉球を日本の古い分家とみなしたのは、琉球の社会と文化を日本のその一部と認識していたからであろう。

折口信夫もまた、柳田国男と同じように先鋭的な日琉同祖論者であった。柳田の奄美・沖縄の旅につづいて、折口も1921年と23年に沖縄を訪れている。そして、島袋源七が1929年に上梓した『山原の土俗』に、「続琉球神道記」を寄せて沖縄の旅の印

象をつぎのように記している。

沖縄で『古事記』や『日本紀』、あるいはその類の古書やもっとも古代の慣例を維持している階級のしきたりの註釈となる活きた実例に多く出会った。それはこれまで驚きの目をもって迎えられていた日琉民族の類似の比較の説をはるかに乗り越えていた。この一週間の旅行は、わたしの心を有頂天にさせるほど、ほとんど見ることも聞くことごとに「我が国の古代を発見した」と回想している（折口 1929: 2-3）。

また折口は、1935年に柳田国男編『日本民俗学研究』に寄せた「地方に居て試みた民俗研究の方法」でも、つぎのような日琉同祖論を展開している。沖縄が島であるだけに過去の生活様式を豊富に残している。そのうえ島の生活で勢力をもっているのは、旧時代の様式を残すことに執着する女神職であった。村落生活の基礎はここにある。だから「ある点で日本の古代と、沖縄の現在とを比較しても、方法としてさしたる錯誤ではないと思はれた」と述懐している（折口 1955: 51）。

ところで、一国民俗学を構築した柳田国男の学問は実に息がながい。驚くべき持続力がある。日琉同祖論も例外ではなかった。敗戦から2年目を迎えた1947年、柳田は折口信夫や伊波普猷などの沖縄研究者の協力を得て『沖縄文化叢説』を世に問うている。敗戦によって米国の統治下に置かれている沖縄の厳しい状況を憂慮して、いまこそ沖縄研究を再出発させなければならないと痛感したのであろう。冒頭の「編纂者の言葉」のなかで、柳田は日本と沖縄の人びとが「根原に於て一つ」ということが、「八九分通りまでは、もはや立証せられても居る」と述べて、日琉同祖論を再認識している（柳田 1947: 2）。

その後も柳田は日琉同祖論の立証につとめ、後述するように1950年代に「海神宮考」（柳田 1997b）、「根の国の話」（柳田 1997c）、「稲の産屋」（柳田 1997d）などという労作をやつぎばやに発表している。いずれも晩年に筑摩書房から上梓された雄篇『海上の道』（1961年）に収録されている。

3.2 日琉同祖論の脱構築

戦後、民族学者が沖縄に関心を寄せるようになったのは、柳田国男が『沖縄文化叢説』を上梓した3年後のことである。日本民族学協会（現・日本文化人類学会）は、1950年11月に機関誌『民族学研究』第15巻第2号で「沖縄研究特集」を編集している。これを企画したのは、歴史民族学から文化人類学に転じた石田英一郎であった。

戦後まもなく石田は、柳田国男が『山島民譚集』（柳田 1997a）で取りあげた日本

の河童駒引伝承に注目し、これをユーラシア大陸の類例と比較して、その文化的系譜関係を追求した『河童駒引考』（石田 1970）を上梓した。そして『民族学研究』が再刊されると、編集者として献身的な努力を重ね、岡正雄（歴史民族学）、江上波夫（東洋史学）、八幡一郎（考古学）を招いて、座談会「日本民族＝文化の源流と日本国家の形成」（第 13 巻第 3 号、1949 年）の司会をつとめるほか、「シャマニズム研究」（第 14 巻第 1 号、1949 年）、「ルース・ベネディクト『菊と刀』の与えるもの」（第 14 巻第 4 号、1950 年）などの特集を企画している。「沖縄研究特集」もこうした企画のひとつであった。この特集号に柳田国男も日琉同祖論を立証しようとした「海神宮考」（1997b）を寄せているが、編集方針をめぐって注目したいことがふたつある。

ひとつは、石田英一郎が「沖縄研究の成果と問題——巻頭のことば」のなかで、従来の日琉同祖論にとらわれず、よりひろい視野から研究をすすめる必要性を強調していることである。

石田は戦前の沖縄研究を評価し、日本と琉球の親近性を十分に認めたとうえで、日本と琉球の「同祖同系を強調するのあまり、沖縄人自身のエートノスの全体的把握や非日本的な要素の究明」が見落とされ、誤った解釈が残されていないかを危惧している。将来の沖縄研究はよりひろい視野に立って、民族学的・考古学的・言語学的・人類学的研究を必要とする、と述べている（石田 1950: 87）。

もうひとつは、石田に実質的な編集を託された沖縄出身の金城朝永が、「編集後記」のなかで従来の日琉同祖論を脱構築し、沖縄文化を日本文化と切り離して、これを「ひとつの独立した単位」として把握することを強調していることである。金城はつぎのようなことを述べている。

敗戦を機に転換期を迎えた沖縄研究は、あたらしい視点を構築する必要がある。その前提として「沖縄の文化を、日本文化の中の変り種と見做し、主としてその中から日本文化の類似点のみを拾い出して比べ合わせるが如き、従来の態度から脱却」しなければならない。そして「琉球文化なるものを、一つの独立した単位として取扱い、所謂大和文化の従属的地位から解放して、それに含まれている種々相を、今少し精密に分析して、我が国のみならず、広く遠く隣接周辺の諸邦との比較をも試みてみる」とが必要だというのである（金城 1950: 148）。

この提言は、石田の問題提起をより先鋭化した言説である。日本文化と琉球文化の親近性をふまえ、琉球を「日本の古い分家」とみなした柳田の日琉同祖論と対峙して、金城は琉球文化を日本文化と切り離す脱日琉同祖論を提起しているからである。そこには、沖縄人（ウチナーンチュ）としての金城のエスニック・アイデンティティに

根ざした心情を読み取ることができる。金城は日本の敗戦をまたとない好機ととらえ、従来の日琉同祖論を脱構築しようとしたのである。

石田英一郎や金城朝永の提言のほかに、その2年後の1952年に、社会人類学者の馬淵東一も「沖縄研究における民俗学と民俗学」を発表し、従来の日琉同祖論をなかば肯定しながら、つぎのような琉球文化亜型論を提唱している。

これまでの沖縄文化の研究は、主として日本との関連をたどる方向でおこなわれてきた。日本と沖縄の文化がいかなる他の文化と比べても、これほど共通の特徴を示すものがないからである。そこに日琉文化ともいべきひとつの文化の型が考えられるが、日本文化と沖縄文化のあいだには、内部的な分岐的变化や異質の文化要素の内在もしくは受容の度合いなどの点でかなりのひらきがあるので、沖縄文化という亜型の存在を考えぬわけにはいかない、というのである（馬淵 1974a: 517-520）。

なお、馬淵は1971年に発表した「沖縄民俗社会研究の展望」のなかで琉球種族亜型論を提起し、日本と琉球の「種族」を混成種族ととらえ、日本と沖縄の種族をそれぞれ同じ種族のなかのふたつの亜種族と推定している（馬淵 1974b: 529-533）。馬淵の種族とは、文化系統を同じくするエスニック・グループのことである。馬淵は日琉双方の種族を混成種族のなかのふたつの亜種族とみなしたわけである。

戦後の日本文化と琉球文化の比較研究は、すくなくとも1950年代前半から70年代前半にかけては、柳田国男をはじめとする沖縄研究の先覚者たちが立証しようとつとめてきた日琉同祖論と、それを軌道修正した馬淵東一の琉球文化亜型論や琉球種族亜型論と真摯に向きあうことが求められていたのである。

4 旅と調査のあいだ

4.1 「根の国の話」の口述記録

南島でフィールド・ワークをはじめたのは、いまから半世紀以上も前のことである。1957年7月から8月にかけて、奄美諸島の加計呂麻島、請島、徳之島を訪れたのを皮切りに、トカラ列島の宝島、中之島、沖縄本島とその離島、八重山諸島の西表島、鳩間島、小浜島などで断続的にフィールド・ワークをおこない、1972年夏の八重山諸島の石垣島を訪れたのが最後の機会となった。20代後半から40代前半にかけての南西諸島の旅であった。

國學院大學の日本文化研究所の研究員に採用される前の、高校教師をしていたころ

のことであろうか。ある日柳田さんから葉書をいただいた。成城の自宅に来るようというのである。早速成城の柳田邸を訪れると口述記録をとるようにいわれた。口述記録をした論考は、柳田さんが斬新な仮説を提起された晩年の雄篇『海上の道』に収録された「根の国の話」であった。南島の農耕儀礼の問題を取りあげた修士論文を、柳田さんの女婿の堀一郎教授に提出したのを知って、柳田さんは南島への関心をもちつけさせようと考えられたのであろうか。

「根の国の話」は、古代日本の他界の根の国と沖縄の聖なる世界のニルヤカナヤ、ニライカナイを対比して、日琉同祖論を立証しようとした論考である。そのなかで柳田さんは、根の国はわが国の固有のことばである、根の国が地下の国と解釈されたのはネという語に漢字の根を当てたためである、ヨミの国という語も黄泉という漢字があてられたために、靈魂が土の底深く入っていくような印象を与えているが、この国が地下の国を意味していたかどうかは疑わしい。このように述べて柳田さんは、琉球語のネグニ（根国）やネドコロ（根所）という語に注目し、根という語は地下ではない、本来出发点もしくは中心点を意味していると推定し、琉球語のN音で始まるニルヤカナヤ、ニライカナイは、古代日本語の根の国のネと同じ語が変化したものではないか、という仮説を立てられた（柳田 1997c: 465-467）。

柳田さんの口述は、民俗学研究所の2階にある書斎でおこなわれた。テーブルを挟んで柳田さんの前にすわると、大学院の講義のときと同じように、柳田さんはわら半紙を四つ切にしたカードを取り出してゆっくり話をはじめられた。柳田さんの話を聴きながら、それをテープ・レコーダーに記録することが、その日のわたしの仕事であった。話が終わると、記録したテープとカードを渡され、これを原稿用紙（400字詰）4、50枚にまとめるように指示された。この「根の国の話」は、1955年9月に同人誌『心』第8巻第9号に掲載された（伊藤 2011a: 45-51）。

4.2 旅の意味

國學院大學の日本文化研究所時代、わたしは研究審議委員の柳田さんのもとの研究生活を送っていた。20代半ばの将来の方途がさだまらない研究者の卵のころである。入所すると東京の下町に生まれ育ち、フィールド・ワークの経験がないわたしに、柳田さんは旅に出るようにと助言された。どこそこの村にこういう人がいる、こういう伝承があるから尋ねてみるとよいと言われ、各地で活躍しているフォークロリストを紹介してくださった。そこで山梨、群馬、和歌山の村々を訪れたものである。和歌山では1カ月ばかり山村をめぐるあるき、書物から学ぶことのできない貴重な経験をし

たことは忘れがたい。

富士山麓にある南都留郡忍野村^{おしの}忍草^{しほくさ}の大森義憲さんは、こうした旅のなかで出会った忘れがたい人であった。そこを訪れたのは田植えのころであつたろうか。水田の隅に置かれた苗束を田の神という^{おの}と教えられたことが記憶に残っているからである。大森さんから2、3人の古老を紹介されたが、どのような話を聞書きしたのかよくおぼえていない。いまでも記憶に残っているのは、大森さんが慶應義塾大学で師事した折口信夫の学問について、盃を傾けながらなつかしように語っていたことである。

ここで大森さんのこと取りあげたのはほかでもない。大森さんが大学卒業後の1935年2月、郷里の山梨県で産出された水晶を売りながら、沖縄本島とその離島、宮古・八重山の島々を訪れ、民俗採集をつづけられたことに触れたかったからである。戦後、大森さんは手もとの採集資料を整理して、これを柳田さんに届けている。この採集資料は、『大森資料』として成城大学民俗学研究所に収蔵されている。その第一分冊の「沖縄採集」のなかに、柳田さんが赤インクで「昭和二十七年三月三日受、同日読了・モウ一度読ンデ見タシ」などと記しているので、柳田さんが『大森資料』を読了したのは、沖縄研究の再出発を意図して『沖縄文化叢説』を上梓した数年後ということになる。

ちなみに、『大森資料』は『大森資料（1）——沖縄採集』『大森資料（2）——沖縄祝女採集』『大森資料（3）——先島採集』『大森資料（4）——先島採集』の4分冊からなる。(1)と(2)は、成城大学民俗学研究所の『民俗学研究所紀要』第3集(1978年)と第4集(1980年)に、(3)と(4)は、同研究所の『諸國叢書』第13輯(1996年)と第14輯(1996年)に収録されている。

わたしが柳田さんの勧めで旅に出てから半世紀以上の歳月が流れている。いまふり返ると、都会育ちのわたしに柳田さんが旅に出るようにと助言されたのは、わずかな期間でも村に滞在すれば、さまざまな事柄に触れることになるろう、いろいろなものを見たり聞いたりするであろう、こうした経験を積み重ねることによって、事実の背後にどのような意味がひそんでいるのか、ということに興味をもつようになるにちがいない。おそらくこのように考えられて、柳田さんはわたしに旅に出るようにと助言されたのであろう。

4.3 旅もどきのフィールド・ワーク——奄美の島々

戦後、奄美の島々がアメリカ政府から返還されたのは1953年12月のことである。返還されてまもない1955年に九学会連合奄美総合調査が実施された。こうして、戦

後の奄美研究が本格的に始動することになった。

わたしが奄美の加計呂麻島と徳之島を訪れたのは、その2年後の1957年夏のことであった。当時、嘉永年間（1848-53年）に奄美大島に流刑された名越左源太が記録した『南島雑話』（名越 1933）、茂野幽考の『奄美大島民族誌』（茂野 1927）、昇曙夢の『大奄美史』（昇 1949）などに報告された、祝女（ノロ）を中心とした男女神役とその行事に関心を寄せていたので、九学会連合奄美総合調査に参加された堀一郎教授から情報を入手し、7月から8月にかけて奄美大島を訪れた。堀さんは國學院大學、東北大学を経て東京大学を定年退官後、1970年4月に成城大学に迎えられ、73年4月に設立された民俗学研究所の初代所長に就任された。そして、翌年8月に生涯を閉じられた。

奄美大島では名瀬市（現・奄美市）で情報収集につとめ、瀬戸内町の対岸の加計呂麻島とその離島の請島や徳之島でフィールド・ワークをおこなった。日本文化研究所に転じて2年目の夏のことである。この奄美の旅は、目的がはっきりしていたので前年の旅とはちがひ、旅もどきのフィールド・ワークであった。

加計呂麻島では旧鎮西村於斉、花富、押角、旧実久村俵、三浦、須古茂、木慈、瀬武などの諸集落を訪れた。請島では請阿室と池地の二集落、徳之島では亀津町井之川、白井、伊仙村犬田布、糸木名、八重竿、天城村平土野、松原、与名間などの諸集落を訪れた。このようにいろいろな土地を訪れたのは、できるだけ多くの話者に接して見聞をひろげることが肝要である、という柳田さんの暗黙の教示によるところが大きい。男女神役とその行事は、加計呂麻島の押角と請島の請阿室、池地、徳之島ではすっかり絶えていたが、加計呂麻島の於斉、木慈、俵、瀬武では、男女神役による行事が実際におこなわれ、祝女を中心とする男女神役（カミニンジョ）と親しく接する機会に恵まれ、貴重なデータを収集することができた。

加計呂麻島の旅の目的は、男女神役とその行事をめぐる宗教民俗誌を作成することであった。そこで、祝女を中心とした男女神役の構成、継承、役割、男女神役がおこなう諸行事、屋外祭場のアシャケとその改築神事などをできるだけ忠実に記述することにつとめた。そのなかで奄美と沖縄の民俗文化の親縁関係を示唆する、旧暦2月と4月の送迎際（ウムケとオーホリ）に去来する来訪神の、ネリヤ神の伝承を採録することができたのは最大の収穫であった（伊藤 1958: 53-139）。

徳之島では、九学会連合総合調査に参加した堀一郎・北見夫俊夫の「奄美大島及び徳之島における米作と稲米儀礼」（堀・北見 1957）を手がかりにして南部の諸集落をめぐり歩いた。当時、南島調査と並行して、日本と琉球の稲作儀礼の比較研究をおこ

なっていたので、稲作法や播種、田植、収穫をめぐる諸儀礼のデータの収集につとめたが、あたらしい発見もいくつかあった。

ひとつは、播種儀礼が衰微していること、いまひとつは、田植儀礼が特定の水田に限定されていること、もうひとつは、収穫儀礼が変異に富んでいることである。なお、堀・北見の報告のなかで取りあげられたタモイが、沖縄から訪れた神（福の神）が立ち寄られた聖なる田であることを確かめることができた。この水田の耕作には緑肥が使われ、ここで祭りをしないと豊作を期待できないと伝承されていた（伊藤 1959: 31-43）。

5 宗教と社会の構造的連関

5.1 日本社会構造論の波動

日本社会がどのような構造的特徴をもっているのかということは、いまでも魅力的な問題のひとつである。柳田国男が沖縄研究の再出発を期して『沖縄文化叢説』を世に問うた2年後の1949年、社会学者の福武直が日本の村落社会をふたつの型に類別している。ひとつは、主従的な縦の結合を編成原理とする同族結合の村落、もうひとつは、ほぼ同等な「家」によって構成される横の連携を編成原理とする講組結合の村落である（福武 1949: 36-37）。

歴史民族学者の岡正雄も、その年に『民族学研究』第13巻第3号で、石田英一郎の司会で江上波夫、八幡一郎とおこなった討論、「日本民族＝文化の源流と日本国家の起源」を増補改訂した『日本民族の起源』のなかで、日本の基層文化を五つの文化複合に類型化し、そのうちのひとつが同族制社会の母体に、もうひとつが年齢階梯制社会の母体になっているという仮説をうち出している（石田・岡他 1958: 241-243）。

ちなみに、岡の仮説に触発された気鋭の社会人類学者の蒲生正男は、家族、戸主権、相続、隠居、嫁の地位、親族などを指標にして全国の社会組織を検討し、岡の同族制社会を東北日本型、年齢階梯制社会を西南日本型とする地域類型を設定している（蒲生 1960: 71-76）。

福武と岡が注目した「家」、同族、年齢階梯制などを指標とした日本社会構造論は、当時、海外調査の機会に恵まれなかったわかい世代の研究者に大きな影響を与えた。そして、彼らを日本の家族、「家」、同族、親族、出自、婚姻、年齢集団、隠居制などの社会組織の研究に向かわせ、「家」と家族、同族と親族の関係をめぐって活発な議

論がおこなわれるようになった。

当時の諸外国では、フランスで構造主義人類学者 C・レヴィ＝ストロースの『親族の基本構造』（1949 年）が刊行され、アメリカでは社会人類学者 G・P・マードックの『社会構造』（1949 年）が出版されていた。英国では R・ニーダムや E・リーチなどの社会人類学者が、家族、婚姻、親族、出自などをめぐって斬新な人類学的研究を発表していた。こうした欧米の動向も、この国の新進気鋭の研究者を大いに触発していたのはいうまでもない。このことは南島研究と決して無縁ではなかった。

わたしが奄美大島と接するトカラ諸島の最南端の宝島を訪れたのは、こうした一連の社会組織の研究がわかい世代の研究者の関心をあつめていたころである。宝島調査は奄美の旅を終えた 2 年後の 1959 年 4 月から 5 月かけておこなった。

5.2 宝島の宗教と社会

鹿児島港で夕刻十島丸に乗船、ローリングとピッチングを繰り返す船のなかで 2 泊して、3 日目に宝島に到着した。宝島に滞在してまもなく気づいたのは、この島の祭祀組織が奄美の加計呂麻島のそれとよく似ていることであつた。村落祭祀が男女神役によっておこなわれ、女性神役が男性神役より優越した地位を占めていたのである。そして、一部の女性神役が、草分けの家もしくは草分けの家と出自関係のある、特定の家筋から選出されていた。

宝島では、男性神役がオヤシュ、女性神役がヌーシとよばれる。女性神役のなかで中核的地位を占めるヌーシは、平家のヌーシまたは君神（キミガミ）とよばれ、トンチとよばれる草分けの家とその 2 軒の分家から選出されていた。トンチとは、かつて島の行政権を掌握していたトンジュ（殿主）の直系の子孫と伝えられ、トンチを中心におおどころに八軒の家が大所八軒とよばれ、いずれも平家の末裔と信じられていた。このことは、宝島にトンチを中心とする父系出自集団が生成されているように想定されるが、トンチと系譜関係のはっきりしているのは 11 戸にすぎなかった。しかも、本家と分家の上下＝主従関係が認められなかった。そこで、このように父系出自集団の生成を阻んでいるのは、双系出自にもとづく親族関係、ドシ（子供）・ニセ（若者）・オセ（壮年）・インキョ（隠居）からなる年齢階梯制、成人男女がひとしく共同労働に参加する義務を課せられた平等原理などの社会的要因によるのではないかという仮説を立てた（伊藤 1961: 58-95）。

この宝島調査は、社会学者の福武直や歴史民族学者の岡正雄の社会構造論などに触発されたもので、宗教と社会の構造的連関が主題になっている。その後沖縄の島々で

も、この主題をめぐって調査を継続したが、こうした主題を選択したのは、当時柳田国男の一国民俗学以降の、旧態依然とした民俗学の体質に違和感をおぼえ、この世界からの脱出をめざしていたからであった。わたしと同世代の社会人類学畑のものは、そのころ英国の社会人類学の影響を受けて親族研究に傾斜していったが、わたしも宝島調査前後から欧米の人類学者の成果を読み漁るようになった。英国王立人類学研究所委員会編『人類学の覚え書と質疑』(*Notes and Queries on Anthropology*, 1954) 改訂第6版を求めて、これを読みはじめたのもそのころのことであった。

6 日琉文化の比較

6.1 沖縄調査の転機

宝島調査を終えてからしばらく経ったころであろうか。思いがけない状況に対応を迫られることになった。國學院大學のある理事に呼び出され、沖縄に行ってみないかと尋ねられたのである。来たる10月に沖縄本島中部のコザ市(現・沖縄市)に開設される短期大学から、國學院大學に教員を派遣してほしいという要請があったというのである。このことは、沖縄でフィールド・ワークをおこなうのにまたとない機会であった。そこで研究審議委員の柳田さんに相談すると、短期大学のことを十分に調べたうえで判断するようにと助言された。柳田さんが亡くなられる3年前のことである。

それからしばらく経ったある日のこと、柳田さんから自宅に来るようにという連絡があった。早速、柳田邸の隠居所を訪ねると、柳田さんは体調を崩されて床に伏しておられた。わたしを枕元によばれ、これまで短期大学についていろいろ調べてみたが、沖縄行きを見合わせるようにと助言された。琉球大学の言語学者、仲宗根政善教授や沖縄の事情に詳しい沖縄出身の在京の知人に問いあわせ、いろいろ情報をあつめた結果、しばらく静観したほうがよいと判断されたのである。

ところが、國學院大學の島根県隠岐総合調査に参加して、7月から8月にかけて現地に滞在しているあいだに、短期大学への赴任手続きが着々とすすめられていた。そして、9月中旬、羽田飛行場から沖縄にむけてあわただしく飛び立つことになった。沖縄がまだアメリカ政府によって統治されていたころのことである。

こうして、1959年10月1日から翌60年9月30日まで、琉球国際短期大学(現・沖縄国際大学に短期大学部として併合され、のちに廃部となる)で助教授としてつと

めることになった。しばらくのあいだ、琉球方言（ウチナーグチ）を習得するほか、沖縄でのフィールド・ワークに必要な実践音声学の学習に時間を割き、本格的な調査をはじめたのは冬休みを迎えた12月になってからである。1959年12月中旬から翌60年1月中旬にかけて、沖縄本島北部の離島、伊是名島を訪れたのを皮切りに、翌60年3月以降は、沖縄本島南西海上の慶良間諸島の阿嘉島と慶留間島、沖縄本島北部の久志村汀間と古宇利島を訪れ、夏休みには宮古と八重山の島々を訪れた。

慶良間諸島の阿嘉島と慶留間島を訪れたのは、稲の播種儀礼に表象される来訪神の伝承を検証することが主要な目的であった。両島は本村と分村の関係にあるので、村落祭祀はすべて両島の男女神役連合によっておこなわれていた。稲の播種儀礼は旧暦9月におこなわれ、全体の構成は、稲種の生育を祈願する宮種（ミヤダニ）、その7日後の海の彼方から訪れると信じられた来訪神（ヤヘーヌミチャンガナシ）を迎える種取り（タントゥイ）、来訪神を送るジフニ祝いからなっていたが、種取りとジフニ祝いはすっかり絶え、宮種行事だけが両島の男女神役連合によっておこなわれていた。宮種行事が存続したのは、男女神役を補佐する老女集団（バーバーター）の加入礼をとまっていたからであろう（伊藤 1977a: 336-350）。

久志村汀間では、稲の起源説話を手がかりにして父系出自集団の門中のあり方を検討した。汀間の人びとはふたつの門中に帰属していたが、両者が汀間を創始した伝えられる神話の先祖によって統合され、沖縄本島中部や南部村落の門中やハラのように、村外の門中に統合されていないことに着目した（伊藤 1979: 117-129）。

古宇利島では、御嶺（ウガン）とよばれる聖地、根所（ニードゥクル）とよばれる宗家、村落祭祀の折目（ウイミ）が、それぞれ村落祭祀をおこなう男女神役を介して統合され、そこに離島独自の祭祀的世界が表象されていることに注目した（伊藤 1977b: 790-805）。

6.2 日琉文化の再検討——稲作儀礼をめぐって

戦後、柳田国男が日琉同祖論を立証するために精力を傾注したのに対して、沖縄出身の金城朝永は脱日琉同祖論を提起したことをすでに指摘した。前年の宝島調査にひきついて、沖縄でも宗教と社会の構造的連関の問題をめぐって調査をおこなったが、フィールド・ワークをつづけているうちに、日本文化と琉球文化のあいだに、これまで想像していた以上に差異があるのに気づかされた。

1960年3月、沖縄本島南西洋上の慶良間諸島の慶留間島に滞在中のことである。宗家（ムートヤー）の老人から、戦時中この島に駐留していた軍人と同類のヤマトン

チュ（日本人）と決めつけられ、協力を拒まれたことがあった。こうして、ヤマトンチュというアイデンティティの確認を迫られたときの、あの衝撃をいまでも忘れることができない。戦争末期の1945年3月の沖縄戦直後に、その老人の娘さんがヤマトンチュの軍人に自決を強いられて亡くなったということであった（伊藤 2011: 60）。

こうした経験は、その後のわたしの琉球文化の研究に微妙な変化もたらすきっかけになった。日本と琉球における稲作儀礼の比較研究を本格的にはじめたのは、沖縄に1カ年滞在して東京に戻ってからのことである。ここでは、日本と琉球の生態的条件の差異を視野に入れて、稲作法や播種・田植・収穫を中心とした稲作儀礼の構成、稲作儀礼の担い手、稲作儀礼に表象される神観念などをめぐって日琉双方の稲作儀礼の比較をおこない、いくつかの差異を指摘した。

ひとつは、日本の農耕儀礼が稲作を基調としているのに対して、琉球の農耕儀礼は稲作儀礼のほかに畑作儀礼が重視されていること、いまひとつは、日本の稲作儀礼が播種、田植、収穫を基調としているのに対して、琉球の稲作儀礼は播種と収穫が中心になっていて田植儀礼が軽視されていること、もうひとつは、稲の豊作をあらかじめ想定した予祝行事が、日本では小正月に集中しているのに対して、琉球では播種儀礼と収穫儀礼に認められ、日本のように独立したかたちをとっていないことなどであった。このほかに、稲作儀礼に表象される神観念にも大きなちがいがあった。日本では、田を守護する田の神が春と秋に田と山、田と天、田と家を去来する信仰がひろく伝承されていたのに対して、琉球では海の彼方から訪れる来訪神というかたちをとっていたことである（Ito 1966: 37-55; 伊藤 1963）。

このように、日本と琉球の稲作儀礼に差異が認められるのは、かつて柳田国男が沖縄を「日本の古い分家」とみなし、また折口信夫が沖縄で「我が国の古代日本を発見した」と述懐したように、日本（ヤマト）と沖縄（ウチナー）の社会と文化が、古代以降のながい歴史過程のなかで、それぞれ独自の変容を遂げていることを示唆している。

6.3 兄弟に対する姉妹の霊的優越

稲作儀礼の研究をおこなっていたころ、日本民族学会でも沖縄の社会と文化への関心が徐々に高まってきたようである。1962年になると、日本民族学会の機関誌『民族学研究』第27巻第1号で、第2回目の「特集 最近の沖縄研究」が企画された。石田英一郎が編集した第1回目の「沖縄研究特集号」（『民族学研究』第15巻第2号）とちがって、この特集にはわかい世代の沖縄研究者がフィールド・ワークにもとづく

実証的研究の論考を寄せている。戦後の沖縄の民族学的研究は、旧世代から新世代にひきつがれ、やっと本格的に始動することになったわけである。わたしも1960年の夏、八重山の島々で収集したデータの一部を手がかりにして、いわゆるオナリ神についての小論を寄稿した（伊藤 1962: 341–346）。

オナリ神とは、兄弟に対して霊的に優越すると信じられている姉妹（オナリ）の敬称である。戦前には柳田国男が1925年に「妹の力」（柳田 1998c）で注目し、伊波普猷が1927年に「をなり神」（伊波 1974）を発表して以来、オナリ神は沖縄研究の重要な課題のひとつになっていた。戦後になると、社会人類学者の馬淵東一が1955年に「沖縄先島のオナリ神（一）」（馬淵 1974a）と「沖縄先島のオナリ神（二）」（馬淵 1974d）を発表して、オナリ神研究のあたらしい道筋をつけていた。こうした先学の研究にみちびかれて、1960年の夏、八重山の石垣島、小浜島、鳩間島、西表島西海岸の祖納で収集したデータを手がかりにして、わたしもオナリ神の問題を取りあげて、つぎのような諸点を指摘した。

ひとつは、兄弟に対して姉妹の霊的優越を示す信仰と習俗が、稲作儀礼のなかの播種儀礼に顕著にみられることである。いまひとつは、この習俗には父系原理が潜在し、兄弟に姉妹がいない場合、姉妹にかわって兄弟の父方の伯叔母（オバ）が代行していたことである。もうひとつは、こうした兄弟と姉妹が男神役（カンニンズ）を継承することが望ましいとされていたことである（伊藤 1962: 341–346）。

7 沖縄の宗教と社会

7.1 「稲の産屋」と西表島祖納再訪

1962年7月初旬、宗教人類学者の古野清人教授を団長とする、東京都立大学南西諸島研究委員会の一行が、柳田国男と面会するために成城大学図書館の柳田文庫を訪れた。沖縄共同調査を実施するにあたっての表敬訪問であった。わたしもこれに参加したが、柳田さんはこの計画をたいへん喜ばれ、研究委員会一行を激励された。それから1カ月後の8月8日に柳田さんは不帰の客になられた。

沖縄共同調査は沖縄本島班、宮古班、八重山班の三つのグループに分けられ、わたしは八重山班に編入された。2年前に訪れた石垣島、小浜島、鳩間島、西表島西海岸の祖納、舟浮のなかから調査地を西表島の祖納に設定し、竹富町役場で祖納住民の家族構成や系譜関係などの基礎調査をおこなってから、鳩間島を經由して西表島西海岸

の祖納へ向かった。

鳩間島に立ち寄ったのは、2年前に訪れたとき世話になった民家の庭先に、対岸の西表島にある水田で収穫された在来種の稲束を積みあげた、シラとよばれる稲積みが保存されていたのを目にしたからである。柳田さんは1953年に発表した「稲の産屋」のなかで、このシラを稲の産屋ではなかろうかという仮説を立てられていた。北ヨーロッパや東南アジアの穀霊信仰を視野に入れ、稲積みを意味する日本語のニホ、ニフと琉球語のシラは、どれも母稲が子稲を生む稲の産屋ではないかと想定されたのである（柳田 1997d: 551-580）。

「定本年譜」によると、1952年「四月二十二日、都立大学における新嘗研究会で、稲霊の話をする」とある。「稲の産屋」は、そのときの発表を文章にしたものであろうか。この論考は、柳田さんの晩年の雄篇『海上の道』に収録されている。

東京の留守宅から柳田さんが亡くなられたという訃報に接したのは、西表島の祖納に滞在していたときであった。その日の昼さがり、南国の太陽が燦々と照りつける浜辺に出かけ、しばらくぼんやりとうち過ごした。帰京ということが脳裏をかすめたが、生前の柳田さんの学問に対するきびしい姿勢を想起して調査の続行を決意した。眼前にひろがる南島特有の幾重にもひろがる海原と澄み切った紺碧の空がいまでも心の片隅に焼きついている。

祖納には1962年夏と63年夏の2度にわたって訪れ、つぎのようなことに注目した。ひとつは、姉妹が姉妹神（ブナルンカン）とよばれ、兄弟に姉妹が不在の場合、父方の伯叔母（オバ）が姉妹神の代行するというように、そこに父系原理が潜在しているが、女性の島外婚出や島外就職にともなって、こうした兄弟と姉妹の関係に変化が生じ、妻が姉妹の代行をしている場合がみられることであった。いまひとつは、祖納の聖地（ウガン）に統合と分化が繰り返されてきたこと、もうひとつは、男神役を中心とした祭祀集団（ヤマニンジュ）が聖地と宗家（トゥリムトゥ）を中心に編成され、男性神役（チヂービ）の地位の継承が父方の血縁に傾斜しているのに対して、女性神役（チカー）のそれはかならずしも父方の血縁に限定されていないことであった（伊藤 1965: 237-271）。

7.2 民俗社会にひそむ論理——沖縄本島とその離島

1960年代の沖縄研究は、西表島祖納再訪後しばらく中断することになった。数年前から断続的におこなってきた山梨県富士山麓の忍野村忍草の調査、九学会連合下北半島総合調査による漁村、磯谷の調査、トカラ諸島北端の共同調査による中之島の調

査をつづけていたからである。中之島にも宝島と同じようにトンチとよばれる宗家が存在していたが、宝島とちがってトンチを中心とした特定の家筋連合はみられなかった（伊藤 1981: 229-239）。

また、1966年から68年にかけて、アメリカ東部のハーバード大学に滞在したことも、沖縄研究が中断したひとつの要因になっている。ハーバード大学では、社会学者のロバート・N・ベラー教授と共同研究「近代日本の宗教と価値」に従事した。ベラーさんと政治学者、神島二郎の『近代日本の精神構造』（岩波書店、1961年）を読んで議論したことが、後に家族国家観という特殊日本のイデオロギーを検討した『家族国家観の人類学』（ミネルヴァ書房、1982年）を上梓するきっかけになった。1968年夏に帰国すると、翌69年4月に日本文化研究所を辞して文学部に移籍し、学生たちとあいまみえることになった。当時大学紛争が頂点に達していたので、フィールド・ワークに出かけられなかったが、まもなくその機会が訪れた。

沖縄本島の中部東海岸の離島、浜比嘉島の浜集落を訪れたのは、大学紛争が下火になった1970年7月から8月にかけてのことである。調査目的を宗教と社会の構造的連関にしほり、聖地（ウタキ、ウガン）、男神役（カミンチュ）がおこなう折目（ウイミ）や御願（ウガン）、ハラとよばれる父系出自集団を取りあげて、つぎのようなことを指摘した。

ひとつは、聖地の配列に規則性がある、特定の聖地と儀礼のあいだに内／外、陸／海、東／西のような象徴的二元論の世界が表象されていること、いまひとつは、男神役の地位の継承が父系原理でつらぬかれていること、もうひとつは、父系出自集団のハラに出自の原点を求める始源志向性ともいうべき「ハラの論理」が認められることである（伊藤 1974: 155-182）。

ハラの論理とは、アメリカの社会人類学者、W・L・ワーナーとP・S・ルントの社会論理（social logic）という概念から示唆を受けた用語である。これを価値体系と言い換えることもできよう。ワーナーとルントによると、社会生活は自然と技術、社会組織、社会論理という四つの側面が基本的要素になっていて、それぞれのあいだにつぎのようなメカニズムが認められるという。社会生活を営むために自然環境から資源を獲得しなければならないが、そのためにはなんらかの技術を開発する必要がある。その技術を用いるためには、相互行為のシステムとして協同関係が必要となる。社会組織はこうした協同関係のために生み出された装置であるが、その社会組織を十分に機能させるためには協同関係を当然のこととする社会論理が存在しなければならない、というのである（Warner and Lunt 1941: 21-26）。

翌71年7月から8月にかけて、九学会連合沖縄総合調査に参加する機会に恵まれ、沖縄本島南部の農村、玉城村糸数を訪れた。この集落のハラにも、浜比嘉島のハラと同じように出自の原郷を村外に求める始源志向ともいべき論理がみられたが、村落祭祀の世界が集落を形成した土着民の家筋のクニ・ムトゥと、女性神役の中核を占める祝女（ヌル）を選出・継承する家筋のヌル・ムトゥ、移住者の按司（アジ）系統の家筋のアジ・ムトゥという三つの宗家（ムトゥ）によって構成され、クニ・ムトゥがハラ全体の中心になっていることを指摘した（伊藤 1976: 181-189）。

浜比嘉島を訪れた1カ月ほど前に、日米両国のあいだで沖縄返還協定が調印され、1972年5月15日、沖縄の施政権が日本に返還されて沖縄は沖縄県になった。いわゆる沖縄の「本土復帰」が実現したのである。その年の12月、八重山の石垣島を訪れ、南部農村の白保と大浜で聖地、祭祀、女性神役の継承過程について社会人類学的調査をおこなった。

なお、八重山を訪れる3カ月前の9月3日から6日にかけて、神奈川県小田原市で第2回「東アジア諸国の家族と宗教」(Family and Religion in the East Asian Countries)が開催され、Change and Stability in the Folk Religion of the Okinawan Societyを発表した。ここでは沖縄の民俗宗教(folk religion)が農業社会の伝統に根ざし、父系原理と女性優位の思想とのかたき結びについていることに注目し、農業構造の変化や都市化にともなって女性神役が減少しているが、沖縄社会に内在する宗教的権威を正統化し、始源を求める集団の論理によって祭祀組織が再編成されていることを指摘した（伊藤 1973: 207-271; Itoh 1974: 51-57）。

また、1973年に日本民族学会で『沖縄の民族学的研究』が刊行されたが、そこに宇宙開闢神話と穀物起源神話、収穫祭の綱引きなどの対立を基調とする行事と対比を基礎とする来訪神慣行を取りあげ、沖縄の世界観を検討した論考を寄せた（伊藤 1973: 207-271）。1959年以来、断続的につづけてきた沖縄調査は、1972年冬の八重山の白保・大浜調査が最後の機会になった。

7.3 宗教と社会の構造的連関の課題

最後に1959年の宝島調査以来、南島調査の主題とした宗教と社会の構造的連関について、ふたつの点を指摘しておこう。

ひとつは、トカラの島々から八重山の島々にかけて、共通している点がいくつかみられることである。村落祭祀が男女神役によっておこなわれ、男女神役のうち女性神役が男性神役より優越した地位を占め、男女神役が村落の草分け筋の宗家と直接また

は間接に結合していることである。このことは、トカラの島々から八重山の島々にいたる民俗社会とその文化が、同じような基層文化の上に生成されていることを示唆している。

もうひとつは、宗家を中核とする父系出自集団が、沖縄本島とその離島でかなり発達しているのに対して、トカラの島々や八重山の島々では十分に生成されていないことである。このことは、トカラの島々から八重山の島々の民俗社会がかならずしも一様ではないことを示唆している。

このほかに、父系主義がたらぬく沖縄本島の門中やハラにも変異がみられることも指摘しておきたい。沖縄本島には、南部や中部のハラのように、かつて琉球王国の行政府があった首里（現・那覇市）に宗家のある父系出自集団（門中）に組み込まれているハラもあれば、北部のハラのように組み込まれないものもあるからである。前者については、かつて「ハラの間中化」として注目されたことがあったが、こうした点についても留意しなければなるまい。

8 おわりに——揺らぐアイデンティティ

1957年から72年にかけて、わたしが訪れた南西諸島は、沖縄の島々が大半を占めている。その沖縄社会では、現在普天間飛行場の移設、米軍の新型輸送機の配置、米軍兵士による女性暴行、尖閣諸島の施政権などをめぐって、政治・社会・安全保障にからむさまざまな問題が起こっている。

いまから18年ほど前のことになるが、戦後50年という節目を迎えた1995年9月、沖縄で衝撃的な事件が起きたことがある。沖縄本島における米軍兵士による少女暴行事件である。このことに苦慮した当時の沖縄県知事は、「琉球王国の復活」という隠喩で沖縄の独立を示唆したといわれている（鈴木1997: 213）。この言説には、「沖縄県民」としてのローカル・アイデンティティというよりは、むしろ「沖縄人」（ウチナーンチュ）としてのエスニック・アイデンティティに根ざしたエスニック・ナショナリズムがかいまみられる。そこに琉球王国以来の共通の歴史、共通の文化、共通の言語、共通の感覚と感情を共有する「沖縄人」としての自意識が鮮明に表象されているからである。

日本民族学会の機関誌『民族学研究』の編集委員会は、こうした沖縄の現実を注視したのであろうか。翌96年に「沖縄の特集」（第61巻第3号）を企画している。編集主任の川田順造は、「『琉球』研究を求めて」のなかで、この特集が琉球の政治的統

合以後のヤマト（大和）の琉球研究を「沖縄人研究者」の立場からとらえ直し、対象とされる社会とその文化のひろがりや研究の視野の取り方を、将来の研究に向けてさぐることを意図したと述べている（川田 1996: 436）。

こうした編集委員会の求めに応えて、沖縄人研究者の比嘉政夫と津波高志が寄稿している。比嘉は「琉球列島文化研究の新視角」を寄せて従来の日琉同祖論を視野に入れ、日本文化と琉球文化の同質性と異質性に言及しているが（比嘉 1996: 437-448）、津波は「対ヤマトの文化人類学」を寄稿し、そのなかで「対ヤマト意識」という概念を提示して日琉同祖論の再考をうながしている。

津波によると、対ヤマト意識とは、奄美の島々から八重山の島々の人びとにおよぶ、ヤマト（日本）とみずからのあいだに刻み込まれた心の刻み目、文化としての刻み目のことで、この刻み目がみずからを「ドミナントな日本文化の担い手ではないと位置づける」ことであるという。そして、津波はヤマトと非連続の「文化それ自体の刻み目としての対ヤマト意識を共有する領域」を『「沖縄」文化領域』とよんでいる（津波 1996: 457-458）。

これは別にあたらしい言説ではない。1970年代はじめの沖縄の「本土復帰」前後に、一部の沖縄独立論者が日琉同祖論を否定して、「沖縄人」を「日本人」の対立概念としてとらえ、沖縄人が日本人に対してもちつづけてきた「意識の切れ」を、沖縄の土着思想の核とする考え方を打ち出していたからである（新川 1970: 22）。

こうした「意識の切れ」を津波は「心の刻み目」「文化としての刻み目」と言い換えたに過ぎない。津波の心情を理解するのにやぶさかではないが、彼に求められているのは、「対ヤマトの文化人類学」を、どのようなかたちで構築するかということであろう。これができなければ津波の言説は、沖縄独立論者の主張をなぞらえた日琉同祖論に対する単なるアンチテーゼに過ぎなくなろう。

なお、津波の「「沖縄」文化地域」という概念も無条件に首肯しがたい。一五世紀以降、琉球王国は版図を拡大して奄美の島々や宮古・八重山の島々を支配したので、津波の「沖縄」とはかつての琉球王国が領有していた土地ということになる。津波はこうした島々を「相対的に個性的で対等な位置にある」と理解したいと述べているが、宮古や八重山の島々の民俗社会とその文化は、沖縄本島のそれとかならずしも一様ではない。しかも、これらの島々はいまなお沖縄のなかで「周縁」に位置づけられているからである（伊藤 2002: 168-169）。

津波の「対ヤマトの文化人類学」は、かつての金城朝永の脱日琉同祖論をふまえて、日本（ヤマト）に対する沖縄（ウチナー）の「異化」を改めて強調した言説に過

ぎない。そこに沖縄人（ウチナーンチュ）としての強烈なエスニック・アイデンティティが表象されているからである。こうした言説は、本土復帰以来の沖縄の人びとが直面している政治＝社会状況と決して無縁ではないが、将来の沖縄研究の方途を明示することが津波に課せられた重い課題になろう。

これからの沖縄の民族学や民俗学は、こうした沖縄社会に潜在しているエスニック・アイデンティティもしくはこれをイデオロギー化したエスニック・ナショナリズムに十分留意しながら、沖縄の島々の民俗社会とその文化を、これまで以上に冷めた目で観察をつづけ、実証的研究をつづけることが求められよう。そして、沖縄（ウチナー）の研究者も日本（ヤマト）の研究者も、戦前から日琉同祖論を立証するために積み重ねられてきた膨大な業績と謙虚に向きあい、これをこれまで以上に冷めた心で再吟味することが求められよう。さらに、わかい世代の沖縄研究者は、かつて社会人類学者の馬淵東一がオナリ神の信仰と習俗をめぐって、沖縄とインドネシア、オセアニアの親族体系の比較をこころみたように（馬淵 1988: 15-112）、沖縄の民俗社会とその文化をよりひろい視野から検討することが求められることになる。

文 献

- 新川 明
1970 『『非国民』の思想と論理——沖縄における思想の自立について』谷川健一編『わが沖縄』6（沖縄の思想）、pp. 5-72、東京：木耳社。
- 福武 直
1949 『日本農村の社会的性格』東京：東京大学出版会。
- 蒲生正男
1960 『日本人の生活構造序説』東京：誠信書房。
- 比嘉政夫
1996 「琉球列島文化研究の新視角」『民族学研究』61(3): 437-448。
- 堀 一郎・北見俊夫
1957 「奄美大島及び徳之島における米作と稲米儀礼」『人類科学』IX: 176-187。
- 石田英一郎
1950 「沖縄研究の成果と問題——巻頭のことば」『民族学研究』15(2): 87。
1970 「新版河童駒引考」『石田英一郎著作集』第5巻、pp. 3-220、東京：筑摩書房（初出は1948年）。
- 石田英一郎・岡 正雄・江上波夫・八幡一郎
1958 『日本民族の起源』東京：平凡社（初出は1949年）。
- Ito, Mikiharu
1966 Rice Rites in Japan and the Ryukyus: A Comparative Study. *Folk Cultures of Japan and East Asia* (Monumenta Nipponica Monographs No. 25): pp.37-55, Tokyo: Sophia University of Press.
1974 Change and Stability in the Folk Religion of the Okinawan Society. *East Asian Cultural Studies* 13: 1-4.
- 伊藤幹治
1958 「奄美の神祭——加計呂麻島ノロ神事調査報告——」『國學院大學日本文化研究所紀要』3輯、pp. 58-139（伊藤『沖縄の宗教人類学』東京：弘文堂、1980に再録）。

- 1959 「徳之島の稲作行事と聖地信仰」『日本民俗学会報』5号, pp. 31-43 (伊藤『沖縄の宗教人類学』東京: 弘文堂, 1980 に再録)。
 - 1961 「寶島の社会と宗教の構造的な理解」『國學院大學日本文化研究所紀要』8輯, pp. 58-95 (伊藤『宗教と社会構造』東京: 弘文堂, 1988 に再録)。
 - 1962 「八重山群島における兄弟姉妹を中心とした親族関係」『民族学研究』27巻1号, pp. 341-346 (伊藤『沖縄の宗教人類学』東京: 弘文堂, 1980 に再録)。
 - 1963 『稲作儀礼の類型的研究——日・琉基層文化の構造——』東京: 國學院大學日本文化研究所 (伊藤『稲作儀礼の研究——日琉同祖論の再検討』東京: 而立書房, 1974 に加筆再録)。
 - 1965 「八重山・西表島の親族関係と祭団の構造と変化」東京都立大学南西諸島研究委員会編『沖縄の社会と宗教』, 東京: 平凡社 (伊藤『沖縄の宗教人類学』東京: 弘文堂, 1980 に再録)。
 - 1973 「神話・儀礼の諸相からみた世界観」日本民族学会編『沖縄の民族学的研究』pp. 207-271, 民族学振興会 (伊藤『沖縄の宗教人類学』東京: 弘文堂, 1980 に再録)。
 - 1974 「祭団の構造と論理——沖縄民俗社会論 (一)」『國學院大學日本文化研究所紀要』33輯, pp. 155-182 (伊藤『沖縄の宗教人類学』東京: 弘文堂, 1980 に再録)。
 - 1975 「柳田国男——学問と視点」東京: 潮出版社。
 - 1976 「村落の論理」九学会連合沖縄調査委員会編『沖縄——自然・文化・社会——』, pp. 181-189, 東京: 弘文堂 (伊藤『沖縄の宗教人類学』東京: 弘文堂, 1980 に再録)。
 - 1977a 「慶良間群島の祭団連合——沖縄の民俗宗教ノート (1) ——」『国立民族学博物館研究報告』2巻2号, pp. 336-350 (伊藤『沖縄の宗教人類学』東京: 弘文堂, 1980 に再録)。
 - 1977b 「古宇利島の聖地と折り目——沖縄の民俗宗教ノート (2) ——」『国立民族学博物館研究報告』2巻4号, pp. 790-805 (伊藤『沖縄の宗教人類学』東京: 弘文堂, 1980 に再録)。
 - 1979 「沖縄本島北部農村の「門中」とその理論——沖縄の民俗宗教ノート (3) ——」『国立民族学博物館研究報告』4巻1号, pp. 117-129 (伊藤『沖縄の宗教人類学』東京: 弘文堂, 1980 に再録)。
 - 1981 「中之島の祭祀とその社会的文脈」小口偉一教授古稀記念会編『宗教と社会』, pp. 229-239, 東京: 春秋社 (伊藤『宗教と社会構造』東京: 弘文堂, 1988 に再録)。
 - 1982 『家族国家観の人類学』京都: ミネルヴァ書房。
 - 2002 『柳田国男と文化ナショナリズム』東京: 岩波書店。
 - 2006 『日本人の人類学的自画像——柳田国男と日本文化論再考』東京: 筑摩書房。
 - 2011a 『柳田国男と梅棹忠夫——自前の学問を求めて』東京: 岩波書店。
 - 2011b 『贈答の日本文化』東京: 筑摩書房。
- 伊波普猷
- 1974 「をなり神」『伊波普猷全集』第5巻, pp. 5-22, 東京: 平凡社 (初出は1927年)。
- 神島二郎
- 1961 『近代日本の精神構造』東京: 岩波書店。
- 川田順造
- 1996 「『琉球』研究を求めて」『民族学研究』61(3): 436。
- 金城朝永
- 1950 「編集後記」『民族学研究』15(2): 148。
- Lévi-Strauss, C
- 1949 *Les Structures élémentaires de la parenté*. Paris: Presses Universitaires de France.
- 馬淵東一
- 1974a 「沖縄研究における民俗学と民族学」馬淵東一『馬淵東一著作集』第1巻, pp. 517-522, 東京: 社会思想社 (初出は1952年)。
 - 1974b 「沖縄民俗社会研究の展望」馬淵東一『馬淵東一著作集』第1巻, pp. 523-570, 東京: 社会思想社 (初出は1971年)。
 - 1974c 「沖縄先島のオナリ神 (一)」馬淵東一『馬淵東一著作集』第3巻, pp. 111-121, 東京: 社会思想社 (初出は1955年)。
 - 1974d 「沖縄先島のオナリ神 (二)」馬淵東一『馬淵東一著作集』第3巻, pp. 123-145, 東

伊藤 南島研究回想

京：社会思想社（初出は1955年）。

- 1988 「オナリ神研究をめぐる回顧と展望」馬淵東一『馬淵東一著作集』補巻, pp. 15-112, 東京：社会思想社（初出は1980年）。

Murdock, G.P.

- 1949 *Social Structure*. New York: Macmillan.

中根千枝

- 1984 『財団法人 民族学振興会 五十年の歩み——日本民族学集団略史』財団法人 民族学振興会編, 東京：民族学振興会。

名越左源太

- 1933 『南島雑話』永井龍一編, 鹿児島：白塔社。

昇 曙夢

- 1949 『奄美史——奄美諸島民俗誌』鹿児島：奄美社。

岡 正雄・八幡一郎・江上波夫

- 1949 「日本民族文化の源流と日本国家の形成——対談と討論——」（司会 石田英一郎）『民族学研究』13(3): 207-277。

折口信夫

- 1929 「琉球神道記」島袋源七『山原の土俗』pp. 1-31, 東京：郷土研究社。
1955 「地方に居て試みた民俗研究の方法」折口信夫『折口信夫全集』第15巻, pp. 23-46, 東京：中央公論社（初出は1935年）。

笹森儀助

- 1894 『南島探験』私家版, 成城大学民俗学研究所柳田文庫所蔵。

茂野幽考

- 1927 『奄美大島民族誌』東京：岡書院。

鈴木健二

- 1997 『ナショナリズムとメディア——日本近代化過程における新聞の功罪』東京：岩波書店。

津波高志

- 1996 「対ヤマトの文化人類学」『民族学研究』61(3): 449-462。

Warner, W. Lloyd and Lunt, Paul S.

- 1941 *The Social Life of a Modern Community*. Westport: Greenwood Press.

柳田国男

- 1997a 「山島民譚集」柳田国男『柳田國男全集』第2巻, pp. 387-692, 東京：筑摩書房（初出は1914年）。
1997b 「海神宮考」柳田国男『柳田國男全集』巻21巻, pp. 416-451, 東京：筑摩書房（初出は1950年）。
1997c 「根の国の話」柳田国男『柳田國男全集』第21巻, pp. 464-486, 東京：筑摩書房（初出は1955年）。
1997d 「稲の産屋」柳田国男『柳田國男全集』第21巻, pp. 551-580, 東京：筑摩書房（初出は1953年）。
1998a 「南島研究の現状」柳田国男『柳田國男全集』第4巻, pp. 78-99, 東京：筑摩書房（初出は1929年）。
1998b 「民間伝承論」柳田国男『柳田國男全集』第8巻, pp. 3-194, 東京：筑摩書房（初出は1934年, 東京：共立社書店）。
1998c 「新たな国学」柳田国男『柳田國男全集』第8巻, pp. 249-262, 東京：筑摩書房（初出は1935年）。
1998d 「妹の力」柳田国男『柳田國男全集』第11巻, pp. 247-261, 東京：筑摩書房（初出は1925年）。
1999 「塚と森の話（五）」柳田国男『柳田國男全集』第24巻, pp. 120-124, 東京：筑摩書房（初出は1912年）。
2000 「神道私見（完結）」柳田国男『柳田國男全集』第25巻, pp. 254-268, 東京：筑摩書房（初出は1918年）。

柳田国男編

- 1947 『沖縄文化叢説』東京：中央公論社。